

倉田和四生著『都市化の社会学』

法律文化社（京都），1970年，A 5：293 pp.

本書は、著者が大学において行なった特殊講義「都市化の研究」の講義案がその骨組みをなしており、『関西学院大学社会学部研究叢書』の2号として出版されたものである。

著者によれば、「時代の問題であるだけに都市化に関する書物や論文は既に数多く発表されている。数多い業績のなかに敢えて本書を加えようとする意図は次のようなものである。」として、まず第1に都市化を社会変動の主要な側面とみて、両者を体系的に関連づけること、第2に都市化の根源を人口現象とみる立場から、人口現象のおもな変数としての「出生」に注目し、出生力の問題を掘り下げて論究すること、第3に都市化は世界的な現象であるから、世界的な視野で比較的に研究すること、そして第4は、都市化の研究を進めるにあたって、「社会システム論」のモデルを援用すること、の四つをあげている。

上述の意図のもとに書かれた本書の構成は次のようである。すなわち、全体を「序論」と「三つの部」に区分して、まず序論（「都市化と社会システムの変動」と題されている）では、第1の課題である都市化と社会システムの変動を体系的に位置づけることを試みるために、T・パースンズの考え方を考察し、さらにこれを展開している。

第1部は「都市化の人口理論」と題され、章1では、人口移動（都市化）と差別出生力の問題から出生力の社会学的研究のわく組みを提示している。章2の都市化と人口構造の近代化、章3の新興国における都市化の諸問題、においては、都市化を世界的な視野で研究し、ことに先進国の都市化と新興国の都市化の違いを明らかにしている。この部においては、第2、第3のねらいが合わせ論じられている。

社会学の門外者である評者が、ここに本書を紹介する理由は、著者が、都市化の基礎として人口変数、ことに出生力の問題を取り上げて深く論究せんとした点に関心を持ったがためである。従来、わが国の社会学においては、都市社会理論の基礎として人口論をおくという考え方はあまりみられなかったと聞くが、その意味でも、またわれわれ人口研究者にとっても注目をひく一書である。とりわけ、本書が人口論の中心に出生力問題をすえたという点が、より特徴的ではないかと思われる。

著者も指摘しておられるごとく、古典的な理論では、都市化の主要な原因は農村と都市の「出生力」に差があるため、都市人口の自然増加率が低いことにあるとされていた。しかし今日における都市人口の自然増加は、必ずしも農村のそれよりも低いとはいえない。今日、これが都市化にとってどの程度の意義を持つものであるかの再検討を迫られている問題であり、われわれも考究しているわけであるが、これらについて著者は社会学的立場からの掘り下げを試みている。このように、出生力の社会学的研究はしだいに認識されてきたが、今後よりいっそう開拓さるべき分野であろう。ともあれ、第1部にまとめられた都市化の人口理論は、なかなか要領よく整理されており、斯界の学究者にとっても有益である。

次に、第2部は「都市化の社会学」で、都市化に関する社会学的な理論が展開されている。すなわち、通章4では都市化の誘因と型についての説明がなされ、章5の都市化の社会学では、都市社会学の理論的發展をあとづけ、その問題点を指摘し、章6では都市化と階層移動の関係の検討、章7ではスラムの成立と都市化の関係をみ、章8では郊外化と社会構造の変容、章9では都市の権力構造と住民参加の問題を論じている。

最後の第3部は「都市化と広域行政」と題されており、ここは、広域行政に関する実態調査をまとめたものである。章10では、都市化・産業化・大都市圏の関係が論じられ、章11では阪神間における広域行政の実態、章12では広域行政と住民意識の問題が取り上げられた。

（山口 喜一）